

Title	イー・ダブルユー・エッカード教授著 ダブルユー・エス・ジェヴォンズの経済学
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.10 (1941. 10) ,p.1311(117)- 1317(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19411001-0117
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19411001-0117">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19411001-0117</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

化的現象としての意義を持つとき、始めて人類の生存に對して價值あるものであり得る。

ルーデンドルフとクラウゼウィッツの二つの主張は、かかる意味において、相互に補充する意味を持つやうに、わたくしには考へられる。たゞ現在の戦争は、この二人の戦争論者の異なる時代以上に出てゐることは注意を要することである。それは、クラウゼウィッツの時代に單一武力戦争が行はれたとすれば、ルーデンドルフの時代には、總動員戦争が、そして現在では總力戦争が行はれてゐる。それぞれの時代におけるそれぞれの戦争形態である。

昭和十六年九月二十一日稿

イー・ダブルユー・エックカード教授著『ダブルユー・  
エス・ジェヴォンズの経済學』

高橋誠一郎

ウィリアム・スタンリイ・ジェヴォンズは早くから我が國に傳へられることの最も多かつた經濟學者の一人であらう。彼れが一千八百七十八年に、ハックスレイ、ロスコー及びバルフォア・スチュアート等諸教授の編纂に係る *Science Primers* 叢書中の二冊として公にした *Political Economy* は、明治十五年、安田源次郎氏により、同十七年、渡邊修二郎氏により、同二十二年、嵯峨正作、古田新六兩氏により、同年、杉山重威氏により、大正十一年、小田勇二氏により邦譯上梓せられ、其の一千八百七十五年の著 *Money and the Mechanism of Exchange* は明治十六年、大島貞益氏によつて邦譯せられ、文部省編輯局から出版せられ、而して彼れの主著 *Theory of Political Economy* は大正二年、我が小泉信三博士によつて邦譯せられ、福田徳三、坂西由藏兩氏編纂の『内外經濟學名著』の第一冊として發兌せられた。我が經濟學界の偉材故福田徳三博士は、ジェヴォンズの業績に對して最大なる讃辭を呈するに吝ならざるものであつて、前掲小泉氏譯の序文に於いて「予は經濟學史の全體を通じて最も偉大、最も絶倫なる破

イー・ダブルユー・エックカード教授著『ダブルユー・エス・ジェヴォンズの經濟學』 一一七 (三三二)

境の効業は之れを我がシエヴォンズに歸せざる可からざると思ふものなり」云々と説いて居られる。

歐米に於いても亦 シエヴォンズ研究は絶えず行はれて、彼れの名を掲ぐることもなく彼れの業績を論ずることなくして晩近の經濟學史を草することは全く不可能事であるが、而も、彼れを主題とした研究論文はシエヴォンズの年刊書 (Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich.) 所収のフーベルト (W. Boehmert) の W. Stanley Jevons und seine Bedeutung für die Theorie der Volkswirtschaftslehre in England. (Jahr. XV, 1891, Heft 3.) 及び American Economic Review. 所載のヤング (A. A. Young) の Jevons's "Theory of Political Economy." (vol. II, 1912.) 及び Annali di economia. 所載のモロソ (Luigi Amoroso) の W. S. Jevons e la economia pura (II, 1925.) などがあつたが、單行論篇に至つては、余の寡聞なる未だこれ有ることを知らぬ。然るに、今、米國コンロッドの州立高等師範學校經濟學教授ヘッカー氏 (E. W. Eckard) によつて昨年、新たに『ダブリュー・ヘス・シエヴォンズの經濟學』 (Economics of W. S. Jevons) が公にせられたことは、我が國の經濟學徒に對しても少なからざる研究上の便宜を興ふることとならう。

## II

著者は先づシエヴォンズの傳記から説き起す。吾人は既にシエヴォンズ未亡人の手に編纂せられた彼れの『書翰及び日誌』 (Letters and Journal of W. S. Jevons, 1886.) によつて此の經濟學界の巨人の面影を具さに偲ぶことが出来るのであるが、著者は主として之れに依據して、僅々九頁の裡に彼れの生涯の記録を収めてゐる。著者は、一千八百四十八年一月に、シエヴォンズ父子商會が破産したことを述べ、此の不幸は、前掲『書翰及び日誌』中には何等の説明も與へられて居らぬのであるが、恐らくは、一千八百四十七年の不景氣の結果であつたらうと斷じ、而して

て、そは、皮肉にも、若いシエヴォンズに景氣變動を研究問題として提供したものであつたかも知れぬと臆測を下してゐる。(p. 2.)。彼れは又、シエヴォンズが濠洲に在つて、入念に其の天候状態を記録せることを述べ、而して、澄み渡つた夜の著しく多いことは天體觀測を奨励し、這般の觀測は亦後に彼れの有名なる太陽斑點景氣變動説を示唆したと説いてゐる。(p. 3.)。

ヘッカー氏は、シエヴォンズが濠洲滞在中、經濟學に興味を有するに至り、向學の一念に燃えて、恐らくは年收約二千磅を生ず可き有利なる地位に就くことを拒んで英國に歸り、倫敦ユニヴァーシティ・コレッジに入學し、一千八百六十年に夙く「經濟の眞理論」を發見するに至る次第を叙する。彼れは、シエヴォンズが、一千八百六十年、スイードア・ウォーターハウス (Theodore Waterhouse) と同位を以つて精神哲學の褒賞を受けたのであるが、經濟學に於いては、一等賞を獲得す可きことを確信しながら、第三位若しくは第四位に置かれたと云ふ挿話を擧げ、是れを以つて恐らくは、支配的地位に立てる經濟學派、即ちジェ・エス・ミル學派の獨斷論に對する、シエヴォンズの苦い感情の發端を畫するものであらうと説いてゐる。(p. 4.)。然しながら、彼れが一千八百六十年六月一日附を以つて其の兄ハーバートに宛てた書翰を讀む者は、彼れの傳統的經濟學說に對する反感が既に是れよりも以前に發して居つたことを知る可きであらう。(『三田學會雜誌』第二十三卷第九號所載拙稿「ウィリアム・スタンリー・シエヴォンズの書翰に現れた其の『經濟學理論』参照」。

## III

第二章に於いては、シエヴォンズの價值及び分配理論が取り扱はれてゐる。著者は先づ其の第一項に於いて、シエヴォンズの『經濟學理論』の現れた一千八百七十一年の交に於いて、廣く行はれて居つたジョン・スチュアート・ミ

ルの理論に就いて述べ、次いで第二項より第七項に亙つてジェヴォンズの價值、賃銀、利子及び地代に關する理論を解説し、而して、最後に第八項に於いて、價值及び分配理論の發達上に於けるジェヴォンズの地位をより正しく評價するが爲めに他の一定の著者の貢獻を要約し、次いで、ジェヴォンズ自身の理論を摘要する。彼れ曰く、「今日、吾人は價值及び分配の問題に對する二個の主要なる進路を有する。第一は長期生産費説を限界的分析と結合する新古典學派的若しくはマーシャル學派的進路であり、第二は一瞬間に於ける經濟的活動を考察し、而して、價格が限界效用に由つて相互依存的に決定せられることを主張するカッセルの進路である。兩者は限界效用原理を使用するものであるから、ジェヴォンズの勞作は兩進路の發達上重要なる位置を占めるものである」と。(p. 34)。吾人は初めジェヴォンズによつて行はれた連續的增加量の效用遞減に關する説明の重要性を明かにすることのなかつたアルフレッド・マーシャルが、後に至つてより正しくジェヴォンズを評價することを學ぶに至り、所謂需要法則を説明するに當つて重要な地位を效用遞減の法則に與へんとしたことを知ると共に、彼れが、長く、ジェヴォンズの『理論』の中心的主張を以つて、クルノー及びブロン・ヂューネンの著作よりも低い平面に立つものと觀て居つたことをも亦認めなければならぬ。而して又、カッセルの如きは、ジェヴォンズが特に重視せる價值理論を經濟學より排除し、價格理論の上に斯學を建設せんとするものであつたことを想はなければならぬ。吾人は尙ほ、本書の著者によつて、ジェヴォンズの快樂主義、彼れの快感及び苦痛理論が現代の諸學者によつて如何に品階せられつゝあるかを更らに充分に學びたかつたのである。

著者は第三章に入つて、如何なる學派的偏見の支配をも受けることなくして資本理論の批判的再検討を行ひ、ジェヴォンズの業績を其の適切なる地位に置くを目標として、過去二世紀に於ける有力なる諸經濟學者の意見を論述せ

んとする。(p. 37)。經濟思想史上に於ける最も激烈なる論戰の二つのものが資本の本質に就いて行はれた。世紀の變る頃からクラークとビローム・バヴァークとは、著書に於いて、又雜誌論文に於いて互に相衝突した。而して、軌近十年間に於いて、ナイト教授 (F. H. Knight) とハイエック教授 (F. A. von Hayek) とは、一方はクラークに從ひ、他はビローム・バヴァークに隨つて資本論争を再開した。(p. 46)。本書の著者は、クラーク及びナイトの資本理論に及ぼしたジェヴォンズの影響は殆んど皆無であることが明かであるが、資本を以つて勤勞の産物待ちつゝある間、勞働者を支持するものと主張するに由つて、ジェヴォンズは、ビローム・バヴァーク及びフォン・ハイエックの意見に對して基礎を置くに資せるものと做してゐる。(p. 51)。

四

第四章に於いては、純理以外の領域に於けるジェヴォンズの最貴重なる勞作『石炭問題』が取り上げられてゐる。吾人は曩きに此の名著に就いて聊か解題を施し、「本書は今や古典となつた。其の後に起つた事實に由つて、此の書中に含有せられてゐる豫言中の或るものは確證せられ、他のものは其の虚偽を立證せられた」と述べたのであるが、(『三田學會雜誌』第三十三卷第四號一九頁)、今、本書の著者によつて、英國に於ける石炭の消費がジェヴォンズによつて推定せられた割合に於いて増加することのなかつた事實を簡單ながら數字を擧げて明示せられたるを欣ぶものである。(p. 56)。

第五章は「貨幣及び景氣變動」と題せられてゐる。吾人は茲に先づジェヴォンズの貨幣論の稍や詳細なる解説を聽くことを得るのであるが、而も、依然、此の偉大なる經濟學者が極めて大なる注意を貨幣に對して拂ひながら、恰も之れを隔離せられた別室内に置くが如き論述方法を探り、其の一般價值理論と何等嚴密なる全一性に於いて貨幣

價値を論ずることのなかつた事實を遺憾としなければならぬ。著者はジェヴォンズが貨幣及び銀行の基本原理の説明の外に、貨幣價値に對し又一般事業状態に對して生じつゝあつた所のものに頗る大なる關心を有したる旨を述べ、而して、彼れは堅牢にして且つ完成せる景氣變動の理論を發達せしめることがなかつたのであるが、而も、彼れの示唆及び探求は後世の更らに充分に發達せる諸理論を豫示し又其の基礎として役立つに至つた旨を論述してゐる。(pp. 70-83.)

著者は第六章「結論」に於いて、現代の經濟學界に於ける最も耀しい存在であるジェー・エム・ケーンズが、ジェヴォンズ及びマーシャルの二碩學を對照し、「ジェヴォンズは鐵瓶の沸騰するのを見て、小供のやうな歡びの聲をあげて叫んだ。マーシャルも亦、同じく鐵瓶の沸騰するのを見たのであるが、而も、彼れは汽機を建造するが爲めに靜かに坐したのである」云々と云へる言を引用して（吾人も亦、會つて此の語を引用したことがある。昭和十五年版『經濟思想史隨筆』二四二頁）、著者は、同教授の言ひ廻しがマーシャル及びジェヴォンズの如き二個の卓越せる科學者の勞作を叙するに當つて使用せられるには餘りにも俗受けを覘ひ過ぎたものであると做して、之れを戒しめてゐる。(p. 90.) 著者は、ジェヴォンズが一千八百七十一年に彼れの『理論』を公にし、一千八百八十二年に四十七歳を以つて歿したこと、並びにマーシャルが一千八百九十年、四十八歳にして『原論』を出版した事實を須らく想起す可きであると做してゐる。ジェヴォンズにして更らに十年生存して居つたならば、彼れは更らに完全なる經濟學上の著作を出して居つたかも知れぬ。然も、彼れは又、ジェヴォンズの最も重要な經濟學に對する寄與が三十歳までに行はれ、彼れの『理論』の主要なる諸點は一千八百六十二年までに發達せしめられた、而して恐らく彼れの獨創力が爾後、彼れから離れたことを認め、縱令ひ、彼れが更らに長く生きて居つたとしても、彼れはマーシャルの

『原論』に匹敵す可き比較的完全なる經濟理論の綜合を構成することがなかつたかも知れぬと説いてゐる。(p. 91.) 「若し天之れに年を假さば」と云ふが如き推測は吾人に取つて多くの興味あるものではない。吾人は唯だ此の經濟學純理、指數及び資源研究等の如き諸領域に於ける偉大なる開路者の不慮の死を深く追惜するのみである。

本書には「方法論」「國家、勞働、組合及び産業」「リチャード・カンチロン」「課税」及び「關係資料」の五を附録としてゐる。ジェヴォンズが、時代の砂の中に埋れて居つたカンチロンを發掘し、而して之れに經濟學史上に於ける重要な地位を與へたことは、經濟學史若しくは經濟書誌の方面に於ける彼れの效績として特記す可きものではあるが、而も彼れによつて行はれた英國古典學派によつて全然閑却せられた卓越せる經濟學者の發見は唯り之れのみには止まるものではない。吾人は此の點に於いて、一千八百七十九年の『理論』第二版に掲げられた彼れの長い序文に對して殊に大なる敬意を表するものである。(八ツ折判百十三頁。三越洋書部賣價金十四圓二十五錢)。